

Special Essay

正解のない問題

循環器病研究所 青木浩樹

医学生の皆さんは「研究」と聞いて何を想像するでしょうか。もちろん、医療と研究は切っても切れません。医学研究に寄せられる期待も大きく、例えば山中伸弥教授が開発したiPS細胞は、しばしば「夢の医療の実現」などと報道されています。それでは、臨床に役立つ研究だけに意義があるのでしょうか。臨床に役立たない研究は無駄なのでしょうか？

医学生の皆さんのほとんどは、将来医師として働くことと思います。勤務医、開業医のような勤務形態は色々でしょうし専門性も様々でしょう。その中で、研究者になる人はわずかだろうと思います。それでは、大多数の人にとって研究は縁遠いものなのでしょうか？

皆さんは、臨床の場に出たその日から実に様々な問題に直面します。教科書通りではない症状、患者さんの複雑な社会的背景、医療チームの人間関係、病院経営など問題は様々です。知識だけで解決することはできません。学校の試験とは違い「正解」はなく参考書もありません。臨床で直面する問題は種々雑多で、経験から学ぶのも簡単ではありません。「経験から学べ」と言うのは、中学生に「繰り返し大学受験するのが勉強だ。高校には行くな。正解集も見ろな」と言うようなものです。皆さんは自分自身で解法を考え、答えを導き出さねばなりません。ところが、少なくとも私は幼稚園から大学まで、「正解のない問題」を解くトレーニングを受けませんでした。

それでは、どうすれば良いのか。そこにこそ医者が研究する意味があると思います。研究とは、まさに「正解がない問題」を解くことです。しかし、臨床と違って研究では問題自体が単純で明確なので、きちんと練習すれば解法を導き出すことは誰にでもできるようになります。正解のない問題を解くことを幾度となく繰り返す研究は、将来出会う様々な問題を考えるための絶好のトレーニングに

なります。実際、研究を完成させた多くの皆さんの先輩が、研究をする前とは考え方が大きく変わったことを実感しています。

解決できそうもない問題に皆さんが会うのはもう少し先かも知れません。そんな問題に出会って、どうすれば良いか分からなくなったら、大学の門をもう一度叩いて「正解のない問題を解く」研究に挑戦してみてください。その中で培われる物の考え方は、きっと皆さんが明日を切り開くための大きな力になることと思います。

